

## 聖書に学ぶ悪の誘惑とその克服Ⅲ

### 第1回 なぜ「恐怖」が支配の手段となるのか

#### 1. 罪なき人に対する誘惑

本シリーズでは、「悪の誘惑」という主題を、これまでとは異なる角度から考察していきます。

すでにⅠ・Ⅱにおいて、私たちは二つの重要な事例を見てきました。一つは創世記におけるエバへの誘惑、もう一つは荒野におけるイエスへの誘惑です。

Ⅰでは、エバが神のみ言を誤って解釈し、蛇の言葉を受け入れるに至った過程を見ました。Ⅱでは、イエスが荒野において、真理・み言・礼拝という三つの原則によって誘惑を退けた事実を見ました。

これらに共通しているのは、まだ罪に支配されていない人間に対する誘惑という点です。すなわち、それは、人間が本来持っている自由と純粋性に対して、外から働きかける形の誘惑でした。

ですから、人間はあくまで主体であり、誘惑はその外側から提示される選択肢として現れます。したがって問題の本質は、「どちらを選ぶか」という自由意志の問題として理解することができました。

#### 2. 墮落後の人間に対する誘惑

しかし、現実の私たちが直面している誘惑は、それとは質的に異なります。なぜなら、私たちはすでに墮落と罪の影響下で生きており、内側に弱さと歪みを抱えた状態にあるからです。この違いは決定的です。

罪のない状態における誘惑は選択の問題として現れますが、墮落後の誘惑は、しばしば支配として働くようになるからです。

人は単に誘惑されるのではなく、ある種の力によって方向づけられ、知らぬ間に特定の思考や行動へと導かれていくのです。

ここにおいて、誘惑は単なる外的要因ではなく、人間の内面に入り込み、その存在のあり方そのものに影響を与えるものとなります。

#### 3. 創世記における転換点—恐怖の出現

では、その支配はどのようにして成立するのでしょうか。聖書はこの問いに対

して明確な手がかりを与えています。創世記の3章10節を見ると、アダムは次のように語っています。

「園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです」。(創世記3章10節)

ここで初めて「恐れ」という感情が人間の中に現れます。それ以前の人間は、神の前にあって何も隠す必要がなく、恐れる理由も持っていませんでした。

人とその妻とは、ふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった。(創世記2章25節)

しかし、神から離れたとき、人間は自らの状態を直視し、それに対して恐れを抱くようになったのです。

この出来事は単なる感情の変化ではありません。ここにおいて人間は、「神との関係において生きる存在」から、「自分自身を基準として身を守ろうとする存在」へと変化しました。その結果として生じたのが恐怖です。

#### 4. 恐怖の本質とは墮落の結果としての感情

この点は極めて重要です。恐れは偶然に生じたものではなく、墮落の結果として必然的に現れた感情です。

神との関係の中にあるとき、人間は自らの存在を神に委ねることができました。

しかし、その関係が断たれたとき、人間は自分自身で自分を守らなければならない存在となります。この自己防衛の状態が、さまざまな形の恐怖を生み出します。

したがって恐怖とは、単なる心理的反応ではなく、神から離れた状態を示す一つの指標と言えます。それは人間の内面における不安の表現であり、同時にその不安を固定化する働きを持っています。

#### 5. 自由を奪う力としての恐怖

さらに聖書は、恐怖が単なる感情にとどまらないことを明確に示しています。

死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放つためである。(ヘブル2章15節)

このように、恐怖は人間を束縛し、その生き方を規定する力を持っています。

ここで語られているのは、恐怖が人間の外側にある圧力ではなく、内側に根を

張る支配力であるということです。

人は恐れるとき、その恐怖を避けるために行動を選択します。しかしその選択は自由なものではなく、恐怖によって制限された範囲の中でのものにすぎません。

この意味において恐怖は自由を奪います。それは目に見えない形で人間を拘束し、結果としてその人の人生全体に影響を及ぼすのです。

## 6. 恐怖による支配の構造

このように見ていくと、墮落後の人間に対する誘惑の特徴が明らかになります。それは単に誤った選択をさせることではなく、恐怖を通して人間を内側から支配することです。

人は恐れるとき、現実をそのまま見ることができなくなります。恐怖は事実を誇張し、可能性を歪め、最悪の結果を想像させます。

その結果、人は本来であれば選ばなかった行動を、自らの意思であるかのように選び取ってしまいます。

ここに、墮落後の誘惑の深刻さがあります。それは外からの強制ではなく、内側から形成された動機によって成立する支配です。

## 7. 恐怖の根源は神からの分離

では、なぜ恐怖はそれほどまでに強い力を持つのでしょうか。その理由は、恐怖が人間の存在そのものに関わる不安と結びついているからです。

人間は本来、神によって自らの存在が守られ、支えられているという確信の中で生きようとする存在です。しかし神との関係が断たれたとき、その土台が揺らぎ、人間の内面には深い不安が生じるようになりました。

その不安が具体的な形を取ったものが、死への恐れ、欠乏への不安、孤立への恐れなど、さまざまな恐怖です。

したがって恐怖は、単なる外的状況への反応ではありません。それは、人間が神との関係を失った結果として生じた、存在の不安の表れなのです。

この観点に立つとき、恐怖の問題は単なる心理の問題ではなく、神との関係の問題であることが分かります。

## 8. 本シリーズで扱うテーマ

以上のことから、本シリーズでは、まず恐怖の起源を明らかにし、それがどのように人間を支配するのかを段階的に見ていきます。

その上で、真理・信仰・愛という観点から、恐怖からの解放について考察していきます。

恐怖は誰にとっても身近な問題です。しかし聖書は、それを単なる心理現象としてではなく、霊的な問題として捉えています。

この視点に立つとき、私たちは初めて恐怖の本質を理解し、その克服への道を見いだすことができるのです。

## 第2回 恐怖の起源

### 1. 恐怖は最初から存在していたのか

本シリーズにおいて扱う「恐怖」を正しく理解するためには、その起源を明らかにする必要があります。

人間は本来、恐れを持つ存在として創造されたのか、それとも後から恐れを持つようになったのか。この問いは、人間の本質を考えるうえで避けることができません。

創世記の記述によれば、人間が創造された直後の状態において、「恐れ」という感情は見られません。

アダムとエバは裸でありながら恥じることもなく、神の前にあって何も隠す必要がありませんでした。この状態は、単なる無知ではなく、神との関係において何の不安もなかったことを示しています。

したがって、恐怖は人間の本来の状態に属するものではなく、ある出来事を契機として生じたものと理解することができます。

### 2. 恐怖の誕生—創世記における決定的瞬間

恐怖が初めて現れるのは墮落の直後です。それを示すのが次の聖句です。

彼らは、日の涼しい風の吹くころ、園の中に主なる神の歩まれる音を聞いた。そこで、人とその妻とは主なる神の顔を避けて、園の木の間に身を隠した。主なる神は人に呼びかけて言われた、「あなたはどこにいるのか」。彼は答えた、「園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです」。(創世記3章8～10節)

ここで注目すべきは、神の歩く音を聞いたときに人の心に恐怖が生じている点です。

本来、神の臨在は喜びであり、安心の源であったはずですが。しかし墮落後の人間にとって、それは恐れるべきものへと変わりました。

この変化は単なる感情の変化ではありません。神との関係そのものが変化した結果として、恐怖が生じているのです。

### 3. 恐怖の区別—本能的恐れと霊的恐れ

ここで注意しなければならないのは、恐れには性質の異なる二つのものがあるという点です。

一つは、危険に対して生じる本能的な恐れです。これは命を守るために与えられた、生きるうえで不可欠な反応です

この恐れがなければ、人は危険を回避できず、命を失うことにもなりかねません。

この意味において、本能的な恐れは創造に属するものであり、否定されるべきものではありません。

人間が危険を察知して身を引くことができるのは、命を守るためにこの機能が与えられているからです。

しかし創世記の3章において現れた恐れは、これとは異なる性質を持っています。それは外的な危険に対する反応ではなく、神の前に立てなくなったことから生じる恐れです。

アダムは神から逃げるために隠れましたが、そこに身体的な危険があったわけではありません。

この恐れは、神との関係が断たれたことによって生じた内面的な不安からくるものであり、存在そのものに関わるものです。

したがってここで問題となっているのは、恐れという感情そのものではなく、神から離れたことによって生じた恐れによって支配されている状態と言えます。

#### 4. 神との断絶と存在の不安

なぜ神から離れることが、このような恐怖を生み出すのでしょうか。その理由は、人間が本来、神との関係を根本として生きる存在だからです。

神との関係がしっかりと結ばれているとき、人間は自らの存在を問う必要がありませんでした。存在そのものが保証されていたからです。

しかしその関係が断たれたとき、人間は自らの存在を自分で支えなければならぬ状態に置かれます。その結果、人間の心には不安が生じるようになります。

自分は守られているのか、これからどうなるのかという不安が生じます。そしてその不安が、死への恐れや欠乏への恐れ、人から拒絶されることへの恐れなど、さまざまな恐怖として現れるのです。

したがって恐怖とは、単なる心理的な反応ではなく、存在の基盤が揺らいだ状態の表れと言えます。

#### 5. 自己中心と恐怖の関係

墮落の結果として起こったもう一つの重要な変化は、人間が自己中心的になったことです。

神を中心として生きていた人間は、自分自身を中心として生きる存在へと変化したのです。この変化は恐怖と密接に関係しています。

自分を中心として生きるということは、自分で自分を守らなければならないことを意味します。その結果、人は常に危険や不安を意識し、それに備えようとするようになります。

ここにおいて恐怖は単なる結果ではなく、自己中心的な生き方を強化する働きもします。

人は恐れるがゆえに自分を守ろうとし、その結果としてさらに自己中心的になり、恐怖を強めていくという循環に入ります。

## 6. 愛と恐怖の対立

この問題に対して、聖書は明確な対比を示しています。それは「愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く。恐れには懲らしめが伴い、かつ恐れる者には、愛が全うされていないからである」（ヨハネ第一 4 章 18 節）という言葉です。

ここで示されているのは、愛と恐怖は両立しないという事実です。恐怖があるところには完全な愛はなく、完全な愛があるところには恐怖は存在しません。

この聖句は、恐怖の本質を理解するうえで決定的です。恐怖とは単に何かを怖がる感情ではなく、愛が欠如した状態、すなわち神との関係における断絶の結果として生じるものなのです。

## 7. まとめ

以上の内容を総合すると恐怖の本質が明らかになります。それは単なる心理的現象ではなく、神から離れた結果として生じる霊的な状態ということです。

言い換えれば、恐怖は霊的症状です。身体に症状が現れるとき、その背後に原因があるように、恐怖という症状の背後には、神との関係の断絶という原因があるということです。

したがって、その根本原因に目を向けなければ、恐怖は形を変えて繰り返し現れ続けます。

そして、ここで問題としている霊的な恐怖は、生命を守るための本能的な恐れとは異なり、墮落によって神から離れ、自分自身を中心として生きるようになった結果として生じたものです。

## 第3回 悪の戦略①恐怖による支配の構造

### 1. 恐怖はどのように働くのか

前回まで、恐怖は墮落とともに生じた霊的な状態であり、神から離れ、自分を中心として生きるようになる過程で形成されたものであることを見てきました。

しかし問題は、恐怖が存在するという事実そのものではありません。重要なのは、その恐怖がどのようにして人間を支配する力になるのかという点です。聖書はこの点について、非常に明確な表現を用いています。

ヘブル人への手紙の2章14～15節に、「死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放つためである」とあるように、恐怖は人間を奴隷状態に置く力として働きます。

ここで語られているのは、外的な拘束ではなく、内面的な支配です。人は鎖につながれていなくても、恐怖によって行動を制限されるとき、実質的には自由を失っているのです。

### 2. 恐怖の具体的な形

人が日常的に感じる恐れには、いくつかの典型的なものがあります。

たとえば、生活が成り立たなくなることへの恐れ、身体の健康を失うことへの恐れ、他者から否定されることへの恐れ、老いて衰えていくことへの恐れ、人から見捨てられ孤立することへの恐れ、そして最終的には死そのものへの恐れです。

これらは一見するとそれぞれ独立した問題のように見えますが、その根底にある構造は共通しています。それは、自分の人生や存在が失われるのではないかという不安です。

この不安が具体的な状況と結びつくとき、それぞれの恐怖として現れるのです。

### 3. 恐怖から思考の支配へ

恐怖が人間を支配する第一の段階は、思考への影響です。人は恐れているとき、物事を客観的に判断することが難しくなります。

恐怖は現実を誇張して最悪の可能性を強調し、まだ起こっていないことを、あたかも確定した未来のように感じさせます。その結果、人の思考は徐々に狭めら

れ、特定の方向へと固定されていきます。

この状態では、人は真理に基づいて考えることができません。恐怖が思考の前提となり、その前提のもとで結論が導き出されるからです。

こうして、恐怖は人間の内面における判断基準そのものを書き換えていきます。

#### 4. 思考の支配から行動の支配へ

思考が支配されると、次に行動が支配されます。人は自分が信じていることに基づいて行動するため、恐怖によって歪められた思考は、そのまま行動に反映されます。

たとえば、不安を避けるために必要以上に蓄えようとしたり、批判を恐れるあまり本来語るべきことを語らなかつたり、失敗を恐れて挑戦を避けたりすることがあります。これらはすべて、恐怖が行動を方向づけている例です。

ここで重要なのは、これらの行動が外から強制されているわけではないという点です。

一見すると自分の意思で選択しているように見えますが、その選択は、恐怖によってあらかじめ制限された範囲の中で行われたものにすぎません。

#### 5. 奴隷化のメカニズム

このようにして、恐怖は人間を奴隷状態へと導きます。ヘブル書が語る「一生涯、奴隷となっていた」という表現は、単なる比喻ではなく、現実の人間の状態を指しています。

そして、恐怖による支配の特徴は、それが気づきにくいという点にあります。

外的な強制であれば、それに抵抗することも可能ですが、内面的な恐怖による支配は、自分自身の思考や感情として現れるため、それに気づくこと自体が難しくなります。

その結果、人は自分が支配されていることに気づかないまま、その支配の中で生き続けることとなります。ここに、恐怖による支配の深刻さがあります。

#### 6. 自由の喪失としての問題

この問題の本質は自由の喪失にあります。人間は本来、神との関係の中で自由に生きるように造られました。しかし恐怖に支配されるとき、その自由は失われます。

ここでいう自由とは、単に好きなことができるという意味ではありません。

真理に基づいて正しく選択することができる状態、それが本来の自由です。しかし恐怖は、この自由を奪い、人を誤った選択へと導きます。

したがって、恐怖の問題は単なる感情の問題ではなく、人間の生き方そのものに関わる問題と言えます。

## 7. まとめ

本記事では、恐怖がどのようにして人間を支配するのか、その構造を明らかにしました。恐怖は思考を歪め、行動を制限し、最終的には人間を奴隷状態へと導きます。

## 第4回 悪の戦略②思考に対する支配

### 1. 支配はどこで成立するのか

前回は、恐怖が人間の思考と行動を通して支配を成立させることについてお伝えしました。

今回はさらに一步踏み込んで、その支配が実際に成立する場はどこなのかを考察してみることにします。

結論から言えば、それは外部の状況ではなく、人間の内面、すなわち思考の領域です。

人は現実そのものによってではなく、現実をどのように理解し、解釈するかによって動かされます。

同じ状況に置かれても、ある人は恐れ、またある人は希望を持つことがあるのはそのためです。

したがって、思考を支配することができれば、その人の行動全体の方向を定めることが可能となります。

ここにおいて、悪がとる戦略の核心が明らかになります。それは、現実を変えるのではなく、現実の見方を歪めることによって人間を支配するという方法です。

### 2. 悪の本質は偽り

聖書はこの点について、「彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいているのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ」（ヨハネ福音書8章44節）と明言しています。

ここで重要なのは、「偽りの父」という表現です。悪の本質は力そのものではなく、偽りにあります。すなわち、真理を覆い隠し、誤った理解を生み出すことによって、人間を誤った方向へと導くのです。

この偽りは、必ずしも明白な嘘として現れるわけではありません。むしろ多くの場合、それは事実の一部を強調し、別の部分を無視するという形で現れます。

たとえば創世記の3章4節で、へびは「決して死ぬことはない」と語りました。実際、アダムとエバはその場で肉体的に死んだわけではありません。

そのため、このへびの言葉は一見すると真実のようにも見えました。しかしその結果、人間は神との関係を失い、霊的に死んだ状態になってしまったのです。

このように、一部の事実だけを強調し、全体を見えなくすることによって、人間の理解は歪められていきます。

### 3. 思考への侵入—誘惑の入り口

では、この偽りはどのようにして人間の思考に入り込むのでしょうか。その入り口となるのが恐怖や不安です。

たとえば、将来に対する不安を感じているとき、「自分は必ず失敗する」「このままではうまくいかない」といった否定的な考えを抱くようになります。

しかし、それは不安に乗じて入り込んだ否定的な解釈にすぎず、本来の自分自身の思いとは異なるものです。

このようにして、偽りは人間の思考の中に入り込み、次第にその人の物事の見方そのものを形づくっていくのです。

### 4. 誇張と歪曲—現実の再構成

そして、人の思考が支配される過程において、重要な役割を果たすのが誇張と歪曲です。

恐怖は現実の一部を過度に強調し、それを全体であるかのように見せます。また、まだ起こっていない可能性を確実な未来であるかのように感じさせます。

このようにして、人は現実そのものではなく、歪められた現実のイメージに基づいて判断するようになるのです。

たとえば、わずかな失敗の可能性が「必ず失敗する」という確信に変わり、他者の一時的な反応が「完全な拒絶」として理解されることがあります。このような思考の歪みは、事実とは異なる結論へと人を導きます。

ここで重要なのは、問題が現実そのものにあるのではなく、自分の中の解釈にあるという点です。

### 5. 習慣化による固定化

こうした歪んだ思考が一度だけで終わることはほとんどありません。同じような思考が繰り返されることで、それは次第に習慣となり、固定化されていきます。

人は繰り返し考えたことを、やがて疑うことなく受け入れるようになります。こうして形成された思考のパターンは、その人の性格や行動様式に深く影響を与えます。

この段階に至ると、思考の支配はほとんど無意識のレベルで働くようになり、

自分がそのように考える理由を意識することなく、同じ反応を繰り返すようになるのです。

これが思考の支配が最も強く働いている状態です。

## 6. 刷新の必要性

このような状態に対して、聖書は明確な解決の方向を示しています。

あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである。（ロマ書 12 章 2 節）

ここで語られているのは、単なる行動の改善ではありません。思考そのものが刷新される必要があるということです。なぜなら、行動は思考から生じるからです。

したがって、思考が歪められている限り、行動もまた歪んだものとなります。逆に言えば、思考が正されるとき、行動もまた変わっていくのです。

## 7. 悪が用いる戦略の本質

以上を総合すると、悪が用いる戦略の本質が明らかになります。それは現実そのものを操作するのではなく、現実に対する人間の解釈を歪めることです。

人は見ているものによってではなく、理解していることによって動きます。その理解が歪められていれば、その人の生き方全体もまた歪められることとなります。

したがって、悪の支配とは、外側から強制的に従わせるのではなく、人間の考え方そのものを歪めることによって行われます。

そのため、思考の問題は単なる心理の問題ではありません。それは、人間が何を信じ、何を基準として生きるかという、神との関係に関わる問題なのです。

## 8. まとめ

本回において、悪がどのようにして思考を支配し、人間の内面に影響を与えるのかを見てきました。恐怖と不安は思考への入り口となり、偽りと歪曲を通して認識を変え、習慣化によって固定化されていきます。

## 第5回 恐怖の具体例①貧困と不安

### 1. 恐怖はどのように具体化するのか

これまでに見てきたように、恐怖は神からの分離によって生じ、人間の思考に入り込み、その解釈を歪めることによって支配を成立させます。

この恐怖は具体的な形を取って現れます。その中でも最も日常的で、かつ多くの人の生き方を左右するのが貧困に対する恐怖です。

この恐怖は、人間の命に直結する問題として感じられるため、非常に強い影響力を持ちます。

### 2. 不足に感じる感覚の本質

貧困に対する恐怖の中心にあるのは、不足しているという感覚です。

この感覚は、実際の状況とは必ずしも一致しません。十分なものを持っていても、人はなお不足を感じ、不安を抱くことがあります。

ここで問題になるのは、実際の物量ではなく人の認識です。人は自分がどれだけ持っているかではなく、「足りていると感じているかどうか」によって、安心したり不安になったりするのです。

この意味において、貧困に対する恐怖は、単なる物質の問題ではなく、思考や物事の受け止め方に関わる問題と言えます。

### 3. 将来に対する不安による支配

この恐怖がさらに強まると、それは将来に対する不安として現れます。「これから足りなくなるのではないか」という思いに支配されるようになるのです。

将来はまだ現実になっていないにもかかわらず、人はその見えない未来の中に欠乏や失敗を想像し、それを恐れるようになります。

そして人は、その不確実な未来に対して過度に備えようとし、その結果として現在の行動が制限されるようになります。

ここに、恐怖による支配の典型的な構造が見られます。現実ではなく、想像した未来が人の思考と行動を支配するのです。

イエスが「だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦労は、その日一日だけで十分である」（マタイによる福音書6章34節）と言われたのも、人間がまだ来ていない未来への不安に心を支配されることを戒めるためでした。

## 4. 執着の形成

このような不安は、やがて物質への執着へとつながります。人は不足を恐れるあまり、必要以上に蓄えようとし、それによって安心を得ようとしします。

しかし、この安心は一時的なものにすぎません。なぜなら、恐怖の原因は外的な不足ではなく、内面的な不安にあるからです。

そのため、いくら蓄えても不安は完全には消えず、さらに多くを求めるといった循環に入ります。

この状態において、物質は本来の生活のための手段ではなく、不安を和らげるためのものとなっていきます。

そして次第に、人は生きるために物を用いるのではなく、物を得ることそれ自体を人生の中心とするようになるのです。

## 5. 思い煩いへの警告

この問題に対して、イエスは明確に語っています。

何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。命は食物にまさり、からだは着物にまさるではないか。空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取り入れることもしない。それなのに、あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる。あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか。（マタイ福音書 6章 25～26節）

ここで語られているのは、単に心配するなという精神論ではありません。

イエスはまず、「命は食物にまさり、からだは着物にまさる」と語り、人間の価値は物質的な条件によって決まるものではないことを示します。

そして空を飛ぶ鳥や野に咲く花を例として示し、神がそれらを養っておられることを指摘します。

この教えの中心にあるのは、神に対する信頼です。すなわち、人間は自分の力だけで生きているのではなく、神の支えの中で生かされているという認識です。

## 6. 恐怖と信頼の対立

ここにおいて、恐怖と信頼の関係が明らかになります。人が恐れるとき、それは神への信頼が揺らいでいる状態にあることを示しています。

もし神が人間の存在を支えておられるならば、貧困に対する恐怖は根本的には成立しません。

しかしその信頼が失われるとき、人は自分自身で未来の安全と安定を確保しよ

うとし、その結果として不安と恐怖に支配されるようになるのです。

したがって、貧困に対する恐怖の問題は、単なる経済的な問題ではなく、神への信頼に関わる問題と言えます。

## 7. まとめ

以上のように、不足を恐れる思考が形成され、それが将来に対する不安へと発展し、さらに物質への執着を生み出すことで、人はその枠組みの中で行動するようになります。

この状態になると、自由に選択しているように見えますが、実際には恐怖によって限定された範囲の中で生きているのです。これが恐怖による支配の具体的な姿です。

## 第6回 恐怖の具体例②死に対する不安

### 1. 最も根源的な恐怖

これまで見てきた貧困や将来に対する恐怖は、いずれも人間の生活に深く関わる重要な問題です。しかし、それらの背後にはさらに深い恐怖が存在しています。それが「死」に対する恐怖です。

人はなぜ貧困を恐れるのでしょうか。なぜ健康を失うことを恐れるのでしょうか。

その根底には、「生き続けることができなくなるのではないか」という不安があります。すなわち、あらゆる恐怖は最終的に生死の問題へと行きつくのです。

この意味において、死に対する恐怖は他の恐怖とは質的に異なり、より根源的なものです。それは人間の存在そのものに直接関わる問題だからです。

### 2. 死に対する恐怖の本質

死に対する恐怖とは、単に苦しみや痛みを恐れることではありません。その本質は「自分がいなくなる」ということへの恐れにあります。

人は、自分がこれからも生き続けることを当然のように感じながら生きています。しかし、死はその前提を根本から崩します。そのため人は死を前にするとき、強い不安を感じるのです。

しかも死は、避けることのできない問題でもあります。私たちは、いつか自分が死ぬことを知っているため、その認識は意識的にも無意識的にも人の内面に影響を与え続けます。

### 3. 死に対する恐怖による束縛

聖書は、この死の恐怖が人間をどのように支配するかについて明確に語っています。

**死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放つためである。（ヘブル人への手紙2章15節）**

このように、死の恐怖は人間を生涯にわたって束縛する力を持っています。

ここで重要なのは、「一生涯」という表現です。死の恐怖は一時的な感情ではなく、人間の生き方そのものに長く影響を及ぼすということです。

人は死を避けることができないと知りながら、その恐怖から逃れようとしま

す。その結果、死を遠ざけることを優先し、本来選ぶべき道を避けてしまうことがあります。

このようにして、死に対する恐怖は、人間の判断や生き方そのものに大きな影響を与えていくのです。

#### 4. 悪が利用する最大の恐怖

このような性質を持つ死に対する恐怖は、悪にとって最も利用しやすい手段となります。なぜなら、それは人間の最も深い部分に直接作用するからです。

他の恐怖は状況によって変化しますが、死に対する恐怖はすべての人に共通して存在します。そのため、この恐怖に働きかけることによって、人間の行動全体に広く影響を与えることが可能となります。

たとえば、殉教者が命の危険に直面しながらも信仰を告白できたのは、死に対する恐怖を超える確信があったからです。

逆に、その確信が失われるとき、人は命を守るために真理を否定する道を選ぶこともあるのです。

これらの行動の背後には、直接的であれ間接的であれ、死や存在に対する不安が関係しています。

#### 5. 復活の宣言と恐怖の克服

この問題に対して、聖書は根本的な解決を提示しています。イエスは「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる」（ヨハネによる福音書 11 章 25 節）と語られました。

ここで示されているのは、死がすべての終わりではないという希望です。もし死によってすべてが終わるわけではないとすれば、死に対する恐怖は絶対的なものではなくなります。

したがって、死に対する恐怖の克服は、単に気持ちを強く持つことによってではなく、死に対する見方そのものが変えられることによって可能となるのです。

#### 6. まとめ

死に対する恐怖は、人間の存在そのものに関わるため、他のあらゆる恐怖の基盤となり、思考と行動の両方に深く影響を及ぼします。

この意味において、死に対する恐怖は、悪にとって人間を根本から支配する最大の武器と言えます。

そして、この恐怖がある限り、人間は完全な自由を持つことができません。

だからこそ聖書は、死を超える希望を示しているのです。死がすべての終わりではないという希望があるとき、人間は初めて、死に対する恐怖から解放される道を見いだすことができます。

## 第7回 恐怖の具体例③人間関係と評価

### 1. なぜ人は「人の目」を恐れるのか

これまでに見てきたように、恐怖は貧困や死といった形で人間の生存に関わる問題として現れます。それと同じくらい強い影響力を持つのが、人間関係における恐怖、すなわち他者の評価に対する恐れです。

人はなぜ、他人の目をこれほどまでに気にするのでしょうか。それは、人間が本質的に関係の中で生きる存在だからです。

人は孤立して生きることはできず、他者との関係の中で自分の位置を見いだそうとします。

しかしこの関係が歪むとき、他者は安心の源ではなく、評価と比較の対象となり、その結果として恐怖が生じます。

### 2. 批判と拒絶に対する恐れ

人間関係における恐怖の代表的な形は、批判や拒絶に対する恐れです。

人は自分が否定されることを避けようとし、そのために自分の言動を調整するようになります。

この恐れは、単に不快な感情にとどまらず、人の選択そのものに影響を与えます。

本来語るべきことを語らず、本来取るべき行動を避けるようになるのは、この恐れが働いているためです。

ここにおいて、恐怖はすでに支配の力として機能しています。人は他者からの批判や拒絶を避けるために、自分が正しいと感じていることよりも、周囲の反応を優先するようになるのです。

### 3. 孤立に対する恐怖と依存

さらに、孤立することに対する恐れがあります。人は他者との関係を失うことを恐れるあまり、不適切な関係であっても、それを維持しようとすることがあります。

このとき、人は関係に依存する状態に入り、関係を維持すること自体が目的化して、その関係の中で受け入れられることを最優先するようになるのです。

その結果、本来の価値観や判断基準が揺らぎ、他者に合わせることが常態化します。ここでもまた、恐怖がその人の行動を決定する力として働いています。

## 4. 社会的評価による支配

このような恐れは、やがて社会的評価全体に対する意識へと広がります。人は個々の人間関係だけでなく、「社会からどう見られるか」を意識するようになります。

この段階で、人は自分の内面ではなく、外からの評価を基準として生きるようになります。何が正しいかではなく、何が評価されるかが判断の基準になります。

この状態では、行動の動機は真理ではなく評価となります。人は評価を得るために行動し、評価を失うことを避けるために選択を制限します。こうして社会的評価は強力な支配の装置となります。

## 5. 承認欲求と真理からの逸脱

この支配の根底にあるのが承認欲求です。人は本来、他者との関係の中で受け入れられることを求める存在ですが、この欲求が恐怖と結びつくとき、それは歪んだ形で現れます。

本来の承認は関係の中で自然に与えられるものです。しかし恐怖に支配される時、自分の努力によってそれを獲得しようとし、その結果、他者の期待に合わせて自分を変えたり、自分の本質を隠したりするようになります。

このような状態では、もはや自分自身として生きているのではなく、他者の期待に応じた役割を演じているにすぎません。

この問題の核心は、真理からの逸脱にあります。使徒パウロは「今わたしは、人に喜ばれようとしているのか、それとも、神に喜ばれようとしているのか」（ガラテヤ 1 章 10 節）と問いかけています。

聖書はまた、「人を恐れると、わなに陥る、主に信頼する者は安らかである。」（箴言 29 章 25 節）とも語っています。

ここで示されているのは、二つの生き方の対立です。すなわち、人からどう評価されるかを基準として生きるのか、それとも神のみ言から見て正しいことを基準として生きるのかという問題です。

人の評価を恐れるとき、人は神のみ言よりも周囲の反応を優先するようになります。

何が正しいかではなく、何が受け入れられるかが基準となるため、結果として真理から離れていくのです。

## 6. 自由の喪失としての問題

このようにして、人間関係と評価に対する恐怖は、人間の自由を奪います。人は自分の判断ではなく、他者の反応に基づいて行動するようになり、その結果として本来の選択の自由を失うのです。

ここでもまた、恐怖による支配の特徴が現れています。それは外からの強制ではなく、内面的な動機として働くため、本人はそれを自覚しにくいという点です。

しかし実際には、その人の生き方はすでに制限されており、自由に選択しているとは言えない状態にあります。

イエスが「そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」（ヨハネによる福音書 8 章 32 節）と言われたのも、人間が恐怖や他者の支配から解放されるためには、真理に立つ必要があることを示しているのです。

## 第8回 恐怖と罪の関係

### 1. 恐怖はなぜ罪につながるのか

これまでに見てきたように、恐怖は人間の思考と行動を決定する強い力として働きますが、なぜ恐怖は単なる感情にとどまらず、罪の行動へとつながるのでしょうか。

この問いに答えるためには、恐怖が人間の内面において、どのような過程を経て罪の行動へと移り変わっていくのかを理解する必要があります。

恐怖そのものは感情であり、それ自体が罪ではありません。しかし人が恐怖によって誤った判断をし、その結果として真理から離れた行動を取るとき、そこに罪が生じます。

したがって問題は、恐怖という感情そのものではなく、その恐怖に対して人がどのように行動するかにあります。

### 2. 恐怖から自己保身へ

恐怖が生じたとき、人間は自然にそれを避けようとします。このときに自分を守ることを優先するようになります。

このこと自体は必ずしも問題ではありません。しかし、恐怖に支配された状態では、「自分を守りたい」という思いが過剰になり、実際以上に危険を大きく感じて過度な反応をするようになるのです。

この段階で、すでに行動の基準は変化しています。本来であれば真理や正しさに基づいて判断すべきところが、恐れを避けることが最優先になるからです。

### 3. 自己保身から自己中心へ

自分を守ることが最優先になるとき、人は次第に自己中心的になっていきます。なぜなら、その状態では、神や他者との関係よりも、自分の安全が優先されるからです。

すなわち、「何が正しいか」ではなく、「自分にとって安全かどうか」が判断基準となります。

その結果、人は自分の利益や安全を守るために、他者を犠牲にしたり、良心に反する行動を取ったりするのです。

このようにして、恐怖は単なる感情にとどまらず、人間の行動を誤った方向へと誘導する力として働くのです。

## 4. 自己中心から罪へ

このように、自分の安全や利益が最優先となると、人は正しいと分かっていることよりも、自分を守ることを優先するようになります。

その結果、不安を避けるために偽りを語ったり、損失を恐れて不正な手段に頼ったり、拒絶を恐れて本来語るべきことを語らなかつたりすることがあります。

ペテロがイエスとの関係を問われたとき、恐れのために「そんな人は知らない」と否認したことも、この構造を示す代表的な例です（マタイによる福音書 26 章 69～75 節）。

これらはいずれも、恐怖によって正しい判断が歪められた結果として生じる行動です。ここに恐怖と罪の結びつきがあります。

## 5. 罪の連鎖構造

さらに重要なのは、罪が単発で終わらないという点です。恐怖から生じた罪は、新たな恐怖を生み出し、それがさらに別の罪へとつながっていきます。

創世記の3章においても、アダムとエバは、墮落の後、恐れて身を隠し、その後さらに責任転嫁へと進んでいきました。ここにも、恐怖と罪が連鎖していく構造を見ることができます。

たとえば、一度偽りを語ると、その偽りを維持するために、さらに偽りを重ねなければならなくなります。

また、不正によって得たものを失うことへの恐れが新たな不安を生み出します。

このようにして、恐怖と罪は互いに強化し合いながら連鎖を形成します。この連鎖が続く限り、人はそこから抜け出すことが難しくなるのです。

## 6. 恐怖と不信仰の関係

この問題の根底にあるのが不信仰です。聖書は「すべて信仰によらないことは、罪である」（ロマ書 14 章 23 節）と語っています。

この言葉は食物に関する議論の中で語られたものですが、その原則は信仰の問題全般に通じるものです。神への信頼を離れた選択は、その動機において、すでに神から離れているからです。

ここで言われている信仰とは、神に対する信頼です。したがって、恐怖によって神への信頼が揺らぐとき、その状態自体がすでに罪の領域に入っていると言えます。

恐怖に支配されると、人は神が自分を支えておられるという確信を持つことが

できません。その結果、自分だけの力で状況をコントロールしようとし、その過程で真理から逸脱していきます。

したがって、恐怖と罪の関係は構造的なものであり、恐怖は不信仰を生み、不信仰は罪を生み出すのです。

## 7. 罪の原因でもあり結果でもある恐怖

ここまで見てきたように、恐怖は罪の原因として働きます。しかし同時に、それは罪の結果でもあります。

もともと恐怖は、神からの分離という墮落の結果として生じたものでした。そしてその恐怖が新たな罪を生み出し、その罪がさらに恐怖を強めていきます。

この意味において、恐怖と罪は相互に循環する関係にあります。一方が他方を生み出し、その連鎖が続いていくのです。この循環こそが、人間を束縛する構造の本質です。

## 8. まとめ

今回は、恐怖がどのようにして罪を生み出すのか、その過程と構造を明らかにしました。

恐怖は自己保身を生み、自己保身は自己中心を招き、その結果として罪が現れます。そして、その罪はさらに恐怖を強めて、罪と恐怖の連鎖を形成します。

## 第9回 克服の原理①真理による解放

### 1. なぜ真理が必要なのか

これまでに見てきたように、恐怖は単なる感情ではなく、人間の思考を歪め、行動を支配し、最終的には罪へ誘導する力として働きます。そしてその中心には、現実に対する誤った理解、すなわち歪められた解釈があります。

したがって、恐怖からの解放は、単に感情を抑えることによってではなく、認識そのものが正されることによって始まります。

人が何を恐れるかは、その人が現実をどのように理解しているかに大きく左右されます。

したがって、恐怖から解放されるためには、真理に基づいて現実を正しく見極め、判断することが必要となるのです。

### 2. 偽りとしての恐怖

第4回で見たように、悪の働きの本質は偽りにあります。現実そのものを変えるのではなく、その見方を歪めることによって人間を支配するのです。

恐怖もまた、この偽りと深く結びついています。恐怖は現実の一部を誇張し、それを全体であるかのように見せます。

また、まだ起こっていない可能性を確実な未来であるかのように感じさせます。

その結果、人は実際の現実ではなく、歪められたイメージに基づいて判断するようになります。このように、恐怖は現実そのものではなく、誤った認識から生み出されるのです。

### 3. 真理による解放

このような状態に対して、イエスは「真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」（ヨハネ福音書8章32節）と語られました。この言葉は、恐怖の問題に対する根本的な解決を示しています。

ここでいう自由とは、外的な制約からの解放ではなく、内面的な束縛からの解放です。恐怖によって歪められた思考が正されるとき、人は初めて本来の意味で自由になります。

重要なのは、自由が感情の変化から生じるのではなく、真理の認識から生じるという点です。人は真理を知ることによって、自分を縛っていた恐怖の根拠が崩

れることを経験するのです。

#### 4. 現実に対する正しい認識

では、真理とは具体的に何を意味するのでしょうか。それは、人間の恐れや感情ではなく、神のみ言に基づいて現実を理解することです。

恐怖に支配されているとき、人は現実を歪めて受け取るようになります。小さな問題を過大に恐れ、まだ起こっていないことを、あたかも避けられない未来であるかのように考えるのです。この歪んだ認識が、恐怖をさらに強めていきます。

しかし、神のみ言に基づいて現実を見ると、人は恐怖によって誇張されていたものに気づくようになります。

そして、問題そのものよりも、恐怖によって支配されていた自分の状態を認識するようになるのです。この認識の変化が、恐怖から解放される第一歩となります。

使徒パウロも、「心を新たにすることによって、造りかえられ」（ロマ書 12 章 2 節）と語っています。恐怖からの解放とは、単なる感情の変化ではなく、み言によって認識そのものが変えられていくことでもあるのです。

#### 5. 恐怖の正体を見抜く

真理によって恐怖から解放されるためには、恐怖の正体を見抜くことが不可欠です。すなわち、それが実際の危険なのか、それとも誇張された解釈なのかを見分ける必要があります。

多くの場合、人が恐れているものは現実そのものではなく、「こうなるのではないか」という想像です。その想像があたかも確定した事実であるかのように感じられるとき、恐怖は力を持ちます。

しかしその正体を見抜くとき、恐怖はその力を失います。なぜなら、その恐怖を支えていた歪んだ認識が真理ではないことが明らかになるからです。

#### 6. 幻想としての恐怖

この観点に立つとき、恐怖の多くは幻想的な性質を持っていることがわかります。ここでいう幻想とは、完全な虚偽という意味ではなく、現実を歪めた認識という意味です。

恐怖は現実の一部を拡大し、それを全体として提示します。その結果、人は実際以上に危険な状況にあるかのように感じます。しかし、その認識が修正される

とき、恐怖は急速に弱まるのです。

したがって、恐怖は絶対的なものではなく、認識に依存する相対的なものです。そしてこの認識は、真理によって変えられる可能性を持っています。

## 7. 真理と自由の関係

ここで改めて、真理と自由の関係を確認することが重要です。自由とは、何にも制約されない状態ではなく、真理に基づいて正しく選択できる状態です。

恐怖に支配されているとき、人は自由に見えて実際には制約されています。なぜなら、その選択は歪められた認識に基づいているからです。

しかし真理を知るとき、その歪みを取り除かれ、選択の幅が広がります。このとき初めて、人は本来の意味で自由に行動することができるようになるのです。

イエスは「わたしは道であり、真理であり、命である」（ヨハネによる福音書14章6節）と語られました。

ここで示されているのは、真理が単なる知識ではなく、神のみ言としてキリストを通して与えられるものであるということです。

したがって、恐怖からの解放とは、単に考え方を換えることではなく、真理であるキリストのみ言を受け取り、その関係の中で現実を見直していくことによってもたらされるのです。

## 第 10 回 克服の原理②信仰と信頼

### 1. 真理の次に必要なもの

前回は、恐怖の克服の第一の原理として、真理による解放を見てきました。恐怖は偽りによって支えられており、真理を知ることによって、その根拠が崩れるということが明らかになりました。

しかし、ここで一つの重要な問題が残ります。それは、真理を知っていても恐れが残るという現実です。理論的に理解していても、それだけで恐怖から完全に解放されるわけではありません。

したがって、真理の認識に続いて必要となるのが、それに基づいて生きる力です。それが信仰であり、神への信頼です。

### 2. 恐怖と信頼の対立構造

恐怖と信頼は、同時に成立することができない関係にあります。人が恐れるとき、それは何かを信頼できていない状態を意味します。逆に、完全に信頼しているとき、人は恐れる必要がありません。

この関係は聖書において繰り返し示されています。「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない」（箴言 3 章 5 節）という言葉はその典型です。

ここで対比されているのは、神への信頼と自分自身への依存です。人が自分の理解や能力だけに頼るとき、不確実性は常に残り、その不確実性が恐怖を生み出します。

しかし神を信頼するとき、その不確実性を、自分だけで支配すべき問題としてではなく、神に委ねるべきものとして受け止められるようになります。

### 3. 委ねることの意味

委ねるとは、自分の責任まで放棄することではありません。人はなすべきことを行い、最善を尽くす必要があります。しかし、その結果まですべてを自分の力で支配しようとするとき、過度な不安と恐怖が生じます。

人は恐れるとき、状況のすべてを自分で管理しようとしませんが、現実には、人間が完全に支配できるものには限界があります。

イエスも、「あなたがたのうち、だれが思いわずらったからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか」（マタイによる福音書 6 章 27 節）と語

られました。ここには、人間の限界を認め、神に信頼することの重要性が示されています。

この限界を認め、自分の責任を果たした上で結果を神に委ねるとき、人は初めて過度な不安から解放されます。なぜなら、「すべてを自分で守らなければならない」という思いから解放されるからです。

#### 4. 信仰による視点の転換

信仰は、現実を変える前に、現実の見方を変えます。恐怖に支配されているとき、人は状況を脅威として見ます。しかし信仰に立つとき、その同じ状況が別の意味を持つようになるのです。

詩篇 23 篇 4 節において、「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわざを恐れませんが、あなたがわたしと共におられるからです」と語られています。

ここで重要なのは、状況が変わっているわけではないという点です。谷は依然として存在し、危険も消えていません。

しかし、その中にあっても恐れない理由は、「神が共におられる」という認識にあります。

このように、信仰は状況そのものではなく、その意味づけを変える力として働きます。

聖書はまた、「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる」（イザヤ書 41 章 10 節）と語っています。

恐怖からの解放は、状況の消滅によってではなく、神が共におられるという確信によってもたらされるのです。

#### 5. 恐怖を否定する力としての信仰

この観点から見ると、信仰は単に恐怖を和らげるものではなく、それを根本から否定する力と言えます。

恐怖は「自分は守られていない」「この状況は自分にとって致命的である」という前提に基づいています。

しかし信仰は、「神が共におられる」「この状況も神の支配の中にある」という前提に立ちます。

この二つの前提は両立しません。したがって、信仰に立つとき、恐怖の前提そのものが崩れることとなります。ここにおいて、信仰は恐怖に対する根本的な対

抗力となるのです。

## 6. 信頼の持続と実践

ただし、このような信仰は、一度の決断で完全に確立されるものではありません。

現実の生活の中では、さまざまな状況が人の信頼を揺さぶります。したがって、信仰は継続的に保たれる必要があります。

日々の選択の中で、恐怖に基づく判断をするのか、それとも信頼に基づく判断をするのかが問われ続けます。

この積み重ねによって、信仰は単なる考えではなく、生き方として定着していくのです。

## 7. 自由への道としての信仰

ここで改めて、自由との関係を考えることが重要です。恐怖に支配されているとき、人は制限された選択の中で生きていますが、信仰に立つとき、その制限は取り除かれます。

これは、すべての問題が消えるという意味ではありません。むしろ問題が存在する中で、それに支配されない状態が生まれるということです。

このような意味で信仰は、人間を内面的な束縛から解放し、自由へと導く力となります。

## 第 11 回 克服の原理③愛による完全な解放

### 1. なぜ愛が最終的な答えなのか

これまで見てきたように、恐怖の克服には段階があります。まず真理によって認識が正され、次に信仰によってその真理に基づいて生きる力が与えられます。

しかし、それでもなお一つの重要な問題が残ります。それは、なぜ人は完全には恐れから解放されないのか、そして何によって最終的にその恐怖が取り除かれるのかという点です。

聖書はこの問題に対して、「愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く。恐れには懲らしめが伴い、かつ恐れる者には、愛が全うされていないからである」（ヨハネの第一の手紙 4 章 18 節）と明確に答えています。

ここで示されているのは、恐怖に対する最終的な解決は、愛によってのみ可能であるということです。

### 2. 恐怖の根底にあるもの

恐怖の本質を振り返ると、それは神との関係の断絶から生じたものでした。人は神から離れたとき、自分で自分を守らなければならない存在となり、その結果として不安と恐怖を抱えるようになりました。

したがって、恐怖を根本から取り除くためには、「自分で自分を守らなければならない」という状態そのものが変えられなければなりません。

そして、それは神との関係が回復されることによって、初めて可能となります。

ここで重要なのは、その関係が単なる義務や条件によるものではなく、愛の関係であるという点です。

### 3. 愛と恐怖の対立

ヨハネの第一の手紙が語るように、愛と恐怖は同時に存在することができません。恐怖があるところには完全な愛は存在せず、完全な愛には恐怖が入り込む余地がありません。

なぜなら、恐怖は「自分は神によって守られていない」という前提から生じるのに対し、愛は「自分は神に受け入れられている」という確信をもたらすからです。

この二つの前提は根本的に相反するものであり、同時に成立することはありま

せん。したがって、愛が満ちるとき、恐怖はその存在の基盤を失うこととなります。

#### 4. 完全な愛とは何か

ここで言われている「完全な愛」とは、人間の努力によって作り出される感情ではなく、神から与えられる愛であり、人間の行いや価値によって変わることはない愛です。

人間の愛はしばしば条件に左右されます。たとえば、自分に良くしてくれるから愛する、期待に応えてくれるから受け入れるというように、その人の行いや状態によって態度が変化しやすいのです。

しかし神の愛は、人間の行いや価値によって左右されるものではありません。

聖書は、「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである」（マタイによる福音書 5 章 45 節）と語っています。

ここで示されているのは、神が人間の条件ではなく、その存在そのものに対して愛を与えておられるということです。その点において、神の愛は完全なのです。

#### 5. 神の愛が恐怖を取り除く理由

『原理講論』には、「イエスが弟子たちを真理によって立たしめ、愛をもって救おうとされた」（113 頁）とあります。

実際にイエスは、「もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである」（ヨハネによる福音書 8 章 31 節）と語られ、み言によって弟子たちを真理の上に立たせようとされました。

そしてイエスは、「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちになさい。もしわたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにおるのである」（ヨハネによる福音書 15 章 9～10 節）と語られ、その愛を十字架を通して示されました。

「友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」（ヨハネによる福音書 15 章 13 節）という言葉の通り、キリストの愛は観念ではなく、実際の犠牲として示されたのです。

また、「主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った」（ヨハネの第一の手紙 3 章 16 節）という言葉が示すように、神の完全な愛は、観念ではなく、歴史の中で具体的に示されたものなのです。

## 6. 関係の回復としての解放

このような愛を受けるとき、人は自分が何かの条件によってではなく、自分の存在そのものが愛されていることを知ります。この確信が恐怖の根を断ち切る力となるのです。

恐怖からの完全な解放は、単に不安がなくなることではありません。それは、神との関係が回復されることによってもたらされます。

人は愛の関係の中にあるとき、自分の存在を守ろうとする必要がなくなりま

す。なぜなら、その存在はすでに受け入れられ、支えられているからです。この状態において、人は初めて本当の心の平安を得ることができます。この平安は状況に依存するものではなく、関係に基づくものであるため、外的な変化によって容易に揺らぐことはありません。

## 7. 恐怖の完全な排除

ヨハネの第一の手紙 4 章 18 節が「完全な愛は恐れをとり除く」と語っている点は非常に重要です。これは恐怖が部分的に残るのではなく、その根本が取り除かれることを意味します。

恐怖が残るのは、まだどこかに不信や不安が存在しているからです。しかし愛が完全であるとき、そのような不安は存在する理由を失います。

この意味において、愛は恐怖に対する最終的な解決であり、それ以上の解決はありません。

## 8. 自由としての愛の状態

このようにして、愛は人間を完全な自由へと導きます。恐怖に支配されていたとき、人は常に何かを避けようとし、防衛的に生きていました。

しかし愛の中にあるとき、その必要はなくなります。人は自分を守るためではなく、愛と真理に基づいて行動することができるようになります。

この状態こそが、聖書が示す本来の人間の姿です。それは恐怖から解放され、関係の中で生きる自由な存在です。

## 9. まとめ

今回は、恐怖の克服の最終的な原理として、愛による完全な解放を見てきました。真理が認識を正し、信仰がそれに基づく生き方を支え、愛が恐怖を完全に取り除くという流れが明らかになりました。

そして、これらは互いに切り離されたものではなく、キリストにおいて一つにつながっています。イエスは真理によって人を立たせ、信仰へ導き、愛によって完全な救いと解放を与えようとされたのです。

## 第 12 回 恐怖から自由になる生き方

### 1. 自由は一度で完成するのか

これまでに、恐怖の起源と支配の構造、そしてその克服の原理として、真理・信仰・愛という三つの要素を見てきました。これらは、恐怖に支配されない自由を得るための不可欠な基盤です。

しかしここで重要な点があります。それは、この解放が一度で完結するものではないということです。

人は真理を知り、信仰に立ち、愛を受けたとしても、なお日常の中で恐れを感じる場面に直面します。なぜなら、私たちは今もなお、悪の世界に生きているからです。

聖書は、「わたしたちは神から出た者であり、全世界は悪しき者の配下にあることを、知っている」（ヨハネの第一の手紙 5 章 19 節）と語っています。

現実の世界には、なお不安や誘惑、苦しみ、罪が存在しており、人はその影響を受け続けています。しかし重要なのは、その恐れに支配されないことです。

したがって問題は、「恐怖があるかどうか」ではなく、「その恐怖にどのように対応するか」にあります。この対応の積み重ねこそが、実際の生き方を形づくっていきます。

### 2. 日常における適用の必要性

恐怖は特別な場面だけで現れるものではなく、日常のさまざまな場面に入り込み、気づかないうちに人の判断や行動に影響を与えます。

たとえば、小さな不安からくる判断の迷い、人間関係における遠慮や回避、将来に対する漠然とした不安など、これらはすべて恐怖の具体的な現れです。

これらに対して、理論として理解しているだけでは十分ではありません。実際の場面で、それとどう向き合うかが問われます。

この意味において、恐怖から自由になる歩みは、常に具体的な状況の中で実践されるものです。

### 3. 思考の実践訓練

まず重要なのは思考の訓練です。第 4 回で見たように、恐怖は思考の歪みを通して働きます。したがって、その歪みを修正することが不可欠です。

人は恐れを感じたとき、その恐れによって生じた否定的な考えを無意識に受け

入れてしまう傾向があります。

しかしそのときに立ち止まり、「それは本当に事実なのか」「それは誇張されていないか」を問い直すことが重要です。

このようにして、自分の思考を検証する習慣を持つとき、恐怖は次第に人を支配する力を失っていきます。思考をそのまま受け入れるのではなく、意識的に見直すことが自由への第一歩となります。

使徒パウロは、「すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ」（コリント人への第二の手紙 10 章 5 節）と語っています。

これは、自分の思考を無条件に受け入れるのではなく、真理に照らして吟味する必要があることを示しています。

#### 4. み言による思考の再構成

思考の訓練において中心となるのがみ言です。人の思考は自然のままでは、過去の経験や不安に影響されやすく、偏った方向に傾きがちです。

しかしみ言に触れるとき、その思考は新しい基準によって再構成されます。人は自分の考えではなく、神のみ言に基づいて現実を理解するようになります。

使徒パウロは、「あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であつて、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである」（ローマ人への手紙 12 章 2 節）と語っています。

み言によって思考が変えられるとは、このように、人の内面の基準そのものが新しくされることを意味します。

このとき、恐怖によって歪められていた認識が正され、状況の見え方そのものが変わっていきます。したがって、み言は、恐怖によって形成された世界の見方を、神の視点から作り直す働きをします。

#### 5. 祈りと信頼の実践

次に重要なのが祈りです。祈りは単なる願望の表現ではなく、自分の不安や恐れを神に委ねる行為です。

聖書は、「神はあなたがたをかえりみていて下さるのであるから、自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねるがよい」（ペテロの第一の手紙 5 章 7 節）と語っています。祈りとは、まさにこのように、自分の不安を神に委ねる行為です。

人は恐れを抱えるとき、それを自分の中で抱え込み、自分だけで何とか解決し

ようとします。しかし、それがかえって不安を強める原因となります。

祈りを通してその恐れを神に委ねるとき、人はすべてを自分で背負う必要がないことを学びます。この繰り返しの中で、神に対する信頼は具体的なものとして形成されていくのです。

したがって、祈りは、恐怖に支配されるのではなく、神に信頼して歩むための具体的な実践です。

## 6. 日々の選択によって形づくられる自由

さらに重要なのは、日々の選択です。恐怖に基づいて行動するのか、それとも信仰に基づいて行動するのか、この選択は日常の中で繰り返し求められます。

この選択は一度きりの大きな決断ではなく、小さな決断の積み重ねです。

また、「御言を行う人になりなさい。おのれを欺いて、ただ聞くだけの者となつてはいけない」（ヤコブの手紙1章22節）とあるように、真理は実際の行動の中で生きるものです。

たとえば、不安がある中でも真理に従って行動する、評価を恐れずに語るべきことを語るといった具体的な選択がそれに当たります。

このような選択を繰り返すとき、恐怖は次第にその支配力を失っていきます。なぜなら、人は自分の選択によって自分の生き方を形成していくからです。

## 7. 真理・信仰・愛の生活で深まる真の自由

このようにして見ると、恐怖から自由になることは、瞬間的な出来事ではなく、継続的な過程であることがわかります。

真理を知り、信仰に立ち、愛を受けることは出発点ですが、それを日常の中で適用し続けることが必要です。

これを継続していく中で、人の内面は徐々に変えられていきます。最初は強く感じられた恐怖も、次第にその影響を失い、やがて支配力を持たなくなります。

したがって、重要なのは完全な状態を一度で達成しようとするのではなく、正しい方向に向かって歩み続けることです。

聖書は、「わたしたちは、善を行うことに、うみ疲れてはならない。たゆまないうでいると、時が来れば刈り取るようになる」（ガラテヤ人への手紙6章9節）と語っています。

恐怖から自由になる歩みもまた、一度で完成するものではなく、継続的な歩みの中で深められていくのです。

## 第 13 回 真の自由とは？

### 1. 本シリーズの総括

本シリーズでは、「悪の誘惑」という主題を、恐怖という観点から体系的に考察してきました。

最初に創世記における墮落を通して恐怖の起源を確認し、それがどのように人間の思考と行動を支配するのかを明らかにしました。

さらに、貧困や将来不安、死、そして人間関係といった具体的な恐怖の形を取り上げ、それらが人間の生き方にどのような影響を与えているのかを見てきました。

そして後半においては、真理・信仰・愛という三つの原理を通して、恐怖からの解放の道を示してきました。

ここでは、それらを統合し、真の自由とは何かを考察します。

### 2. 外的な制約と内的な束縛からの解放

まず確認すべきことは、自由の意味です。一般に自由とは、自分の望むことを制約なく行うこととして理解されることがあります。しかし、この理解は十分ではありません。

なぜなら、人は外的な制約がなくても、内面的な恐怖に支配されている場合があるからです。恐怖によって判断が歪められているとき、その選択は自由なものとは言えません。

したがって、自由とは、単に外的な制約がない状態ではなく、内面的な束縛から解放された状態でなければなりません。

### 3. 恐怖による支配の本質

これまでに見てきたように、恐怖は人間の内面に入り込み、思考を歪め、行動を制限し、最終的には罪へと導く力として働きます。

その特徴は、それが外から強制されるものではなく、あたかも自分自身の意思であるかのように感じられる点にあります。

人は恐怖に基づいて選択しながら、それを自分の判断であると考えてしまいやすいのです。

このような状態において、人は表面的には自由に見えながら、実際には見えぬ形で支配されています。これが悪による支配の本質です。

## 4. 自由の定義

以上を踏まえると、自由の定義は明確になります。真の自由とは、恐怖によって歪められた判断から解放され、真理に基づいて選択することができる状態です。

これは単に恐れを感じないということではありません。恐れが存在しても、それに支配されることなく、正しいと知ることを選ぶことができる状態です。

この意味において、自由とは感情の状態ではなく、選択の質に関わるものなのです。

## 5. 自由に至るための道

この自由に至るための道は、本シリーズで見てきた三つの原理によって構成されます。

まず、真理が必要です。恐怖は偽りに基づいているため、その誤りを正すことが出発点となります。真理によって認識が正されるとき、恐怖の根拠は崩れ始めます。

次に、信仰が必要です。真理を知るだけでは不十分であり、それに基づいて生きることが求められます。神への信頼によって、人は恐怖に基づく選択から離れることができます。

そして最終的に愛が必要です。愛は恐怖の根そのものを取り除き、人間を神との完全な愛の関係へと回復させます。このとき、恐怖はその存在の基盤を失い、人を支配することができなくなります。

## 6. 悪の支配からの解放

このようにして、人間は悪の支配から解放されます。悪の支配とは、力による強制ではなく、恐怖と偽りによる内面的な束縛でした。

したがって、その解放もまた内面的な変化として現れます。思考が正され、信頼が回復され、神との関係が再構築されるとき、人はもはや恐怖に支配されることはありません。

ここにおいて初めて、人は本来の意味で自由な存在となります。

## 7. 自由としての生き方

真の自由は、一時的な状態ではなく、生き方として現れます。それは恐怖を完全に感じなくなるのではなく、恐怖があってもそれに支配されない生き方です。

このように生きる人は、状況に左右されることなく、真理に基づいて行動することができます。貧困や死、人間関係といった問題が存在しても、それらが最終的な決定要因とはなりません。

この意味において、自由とは外的条件の変化ではなく、内面的な基準の確立とも言えるのです。

## 8. 結論—恐怖を超えた真の自由

以上のことから明らかなように、真の自由とは、恐怖に支配されない状態です。それは恐怖が存在しない世界ではなく、恐怖が支配力を持たない状態です。

このような自由は、人間の努力によってのみ達成されるものではなく、真理・信仰・愛という神との関係の中で与えられるものです。

そしてそれは、日常の中で実践されることによって現実のものとなります。

本シリーズで見てきたように、悪の誘惑は恐怖を通して人間を支配しようとしています。

しかしその支配は絶対的なものではなく、真理によって明らかにされ、信仰によって退けられ、愛によって取り除かれるものです。

したがって、たとえ恐怖に満ちた現実の中に生きているとしても、人は自由に生きることができます。この自由こそが、聖書が示す人間の本来の姿であり、回復されるべき状態なのです。

使徒パウロは、「あなたがたは再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのである」（ローマ人への手紙 8 章 15 節）と語っています。

聖書が示す自由とは、恐怖に縛られた奴隷の状態から解放され、神との関係の中で生きる状態なのです。

恐怖から自由になることは終点ではありません。それは、神のために生きるという本来の目的に向かって歩み始める出発点です。

真の自由とは、神と隣人のために自分を用いることができる状態です。そのような生き方の中にこそ、悪の誘惑を根本から超える力があるのです。

ガラテヤ人への手紙 5 章 13 節には、「あなたがたが召されたのは、実に、自由を得るためである。ただ、その自由を、肉の働く機会としないで、愛をもって互に仕えなさい」とあります。

聖書が示す自由は、自分を中心に生きることではなく、愛によって神と隣人に仕える自由なのです。